

## 台兒庄の戦場における日本軍の装甲部隊

姜 克實

### 1. 中国軍の記録

台兒庄の戦いは、国民党軍の対日作戦における初の「大捷」と宣伝されてきたが、その実態を把握するために、当然日本軍に与えた損害の程度は関心の的になる。日本軍が台兒庄から撤収した4日後の1938年4月11日、国民政府軍事委員会政治部長陳誠將軍による公式な戦果発表が行われた。曰く「敵の火砲七十門、戦車四十台、装甲車七十台、トラック百台あまりを鹵獲した」とある<sup>1</sup>、この発表は、のち政治部宣伝部門（第三庁）の責任者郭沫若に暴露されたように「拡大宣伝」であり、事実ではないが<sup>2</sup>、のち内外における政治宣伝の効果が、故事、文学作品、歴史記録などに影響を及ぼし、さらに戦後の愛国主義教育に受け継がれ、長い間、台兒庄の戦いにおける敵の損失が誇張され、政治に利用される傾向があった。

実際、日本軍の台兒庄の戦いにおける損失はどの程度のものか、兵員の損害に関して、すでに別論に述べたので<sup>3</sup>、今度は兵器の損害について検討してみる。兵器というと、重火器と言われる火砲類、また戦車、装甲車などの損害について関心が高いので、本論では、旧日本軍の文献資料の記録を中心に、中国側の記録と照らしあわせながら、台兒庄の戦いに参加した日本軍の戦車、装甲車部隊の戦い、また損害の様子を明らかにしたい。

台兒庄の瀨谷支隊（歩兵第三十三旅団を基幹とする、前線兵力約12000名の混成部隊）は、いったいどれほどの装甲部隊を持っていたか。中国軍側の電報、「戦闘詳報」にもいくつかのデータが記録されていた。第五戦区司令長官李宗仁が3月29日、蒋介石宛の電報の中で、「会戦以来、敵の増援部隊は兵員4000、砲20余門 戦車3、40輜に達し…」、その中、「戦車9輜、装甲車2輜我が軍に撃破された」<sup>4</sup>と報告し、「第30師台兒庄戦役戦闘詳報」3月30日条にも「北田營より南進の敵歩兵、騎兵、砲兵約一聯隊、20輜の戦車とともに賈口方向に前進中」、「敵戦車11輜、装甲自動車2-30輜は、3-400名の敵兵を運送中」<sup>5</sup>との記述が見られる。《第27師台兒庄戦役戦闘詳報》は台兒庄全隊の敵兵力について「敵軍兵力…は歩兵約5個聯隊、砲兵1個聯隊（野山砲3-40門、重砲7、

<sup>1</sup> 《香港華字日報》1938年4月11日、14日、《台兒庄戦役史料選編》《台兒庄戦役資料選編編集組・中国第二歴史档案馆資料編輯部》中華書局、1989年、112頁。

<sup>2</sup> 「日本軍の戦史記録と台兒庄敗北論」『岡山大学文学部紀要』63号、2015年7月、38-40頁、参照。

<sup>3</sup> 《台兒庄戦役日本軍死傷者数考》《歴史学家茶座》（第34輯）濟南：山東人民出版社、2014年12月、参照。

<sup>4</sup> 「李宗仁電報 3月29日」、前掲《台兒庄戦役史料選編》、154、155頁。

<sup>5</sup> 前掲《台兒庄戦役史料選編》48頁。なお、賈口、營田などは泥溝西の地名であり、この情報は30日戦場入りの瀨谷支隊第十聯隊のことを報告しているので、情報中の「戦車」とは第十聯隊に配属された独立軽装甲車第十二中隊のことであると分かる。



で、合わせれば台児庄の戦場に現れたのは、戦車7輛と軽装甲車39輛になる。この中で戦車4輛と軽装甲車7輛が撃破され、日本軍撤退後、台児庄の戦場に遺棄されていた。

先ず、軽装甲車の性能について見てみよう。

94式軽装甲車は元々火砲の牽引車として開発されたが、試験運用の結果、牽引、輸送の他、偵察、警戒、指揮などにも適性が見出され、呼称を「装甲牽引車」から「軽装甲車」

に変更し<sup>13</sup>、日中戦争勃発後、89式中戦車と共に機甲戦力として戦場に投入され、独立軽装甲車中隊(軍隊符号LPWS)が編成されるようになった。機動力に優れ、最大時速は40キロにもなり、特に平原地帯で威力を発揮し、「豆戦車」の愛称で呼ばれた。

一方、図表2の写真<sup>14</sup>からも分かるように、長さわずか3.08メートル、高さ1.62メートル、重量2.7トン、乗員2名の小型車輛(サイズは今の軽自動車よりも小さい)で、装甲も6-8MMで非常に薄く、「床部わずか4MM」であった。この厚さは、日本軍主力の92式重機関銃の徹甲実包を使えば500メートル距離で正面貫通できる。また、肝心の砲はなく、旋回銃塔に91式車載軽機関銃一丁のみ装備されていた(予備銃身一丁収納)<sup>15</sup>。91式車載軽機関銃は日本軍主力の11年式軽機関銃の改造型(コンパクト化)で、戦闘車輛の武器としては非力な面があった。

一方、サイズと関係なく、銃塔があり、装甲、履帯もあるため、中国軍から「戦車」(タンク)と呼ばれたのだろう。

この軽装甲車輛につき、歩兵第六十三聯隊は戦場総括において「搜索ノ為軽装甲車ハ使用価値大ナリト認ムルモ其性能ハ単独挺進行動ヲナスタメニハ故障ヲ少ナカラシムル如ク更ニ強化ヲ必要トセン」<sup>16</sup>と、搜索、偵察の価値を認めながら、単独行動の場合の故障のリスクを指摘した。車輛性能面の注文であろう。

これに対して、89式中戦車は長さ5.7メートル、幅2.18メートル、高さ2.5メートル、重量11.8トン、乗員4名の本格的な戦車で、90式57MM戦車砲一門のほか、91式軽機関銃一丁が装備された。最大速度は26キロで94式軽装甲車より遅いが、堂々とした戦車である<sup>17</sup>。装甲は12-17MMで、当時の戦車としては薄い方ではあるが、普通150メートルからの平射砲の攻撃に耐えうるとされた。



図表2 行軍中の94式軽装甲車部隊

<sup>13</sup> 「九四式軽装甲自動車九四式装甲牽引自動車仮制式制定ノ件」Ref. C01001361800. 参照。

<sup>14</sup> 青井特派員撮影『アサヒグラフ』、1938年10月26日号。

<sup>15</sup> 前掲「九四式軽装甲自動車九四式装甲牽引自動車仮制式制定ノ件」Ref. C01001361800 No. 2068-9.

<sup>16</sup> 前掲『歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報』Ref. C11111254200 No.1146.

<sup>17</sup> 「陸戦兵器要目表」Ref. A03032103400. No.62.



図表3 89式中戦車

編制上一中隊（軍隊符号TK）に戦車10輛と94式軽装甲車5輛、併せて15輛となるが<sup>18</sup>、台兒庄に参戦した支那駐屯軍臨時戦車隊は、戦車が3輛（1小隊）と少ない臨時編成であり、中隊としての戦力は幾分低下した。

以上のように、瀨谷支隊に配属された装甲部隊は、武器性能、実力として決して十全ではないが、台兒庄の戦場に戦車、装甲車を一台も持たない中国軍（但し、鉄道で動く装甲列車がある）に比べ、持つだけで断然優位で

あった。特に脚の早い独立軽装甲車部隊の出現は、南下作戦が開始してから界河、滕県、官橋、臨城の戦場で、対戦車砲を持たない四川軍を心理的に圧倒し、この怪物の前、四川軍は重機関銃、迫撃砲を捨ててまで逃げまわった。3月15日午後、滕県東王廟附近の戦闘で、退却中の約1000人の四川軍に対し、軽装甲車第十中隊と第十二中隊は南北双方から同時に挟み撃ち攻撃をかけ、敵を「蹂躪」し「約三百五十ヲ斃」した戦果が報告された<sup>19</sup>。17日官橋附近の戦闘にも「本道西側ニ於テ退却スル五〜六百ノ敵ヲ追撃シ蹂躪及ビ射撃ニ依リ之ヲ潰乱セシメ」、その後于家店南側においても「敵山砲兵隊ニ追及之ヲ蹂躪撃滅シ」、砲3門を鹵獲した<sup>20</sup>。『磯情』の記録では、この日の戦いで軽装甲車の二個中隊は併せて700人の四川軍兵士を斃したという<sup>21</sup>。

### 3. 戦車隊の遭難

台兒庄の戦いは3月24日、「台兒庄派遣部隊」（歩兵一個大隊、聯隊砲約一個中隊、野砲兵一個中隊を中心）という兵員1864名、砲4門、馬340匹の小部隊によって幕を開けた<sup>22</sup>が、戦車、装甲車が戦場に投入されたのは、その第二段階、すなわち「台兒庄攻略部隊」（部隊長歩兵第六十三聯隊長福栄真平）が編成、派遣された3月27日以降である。

第二大隊による台兒庄城への第一次の攻撃は3月24日夕方に行われ、突撃隊の第七中隊の一部（約十名）は大隊副官奥谷勤中尉の指揮下で城内に突入したが、閉じ込められ全滅し、攻撃は失敗に終わった<sup>23</sup>。初戦の失敗を挽回するため、新たな兵員（歩兵第六十三聯隊第三大隊）とともに、

<sup>18</sup> 「昭和十二年度陸軍動員計画合同細則の件」 Ref. C01007658900. No.444. 参照。

<sup>19</sup> 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」 Ref. C11111252500. No.731.

<sup>20</sup> 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」 Ref. C11111252600. No.769.

<sup>21</sup> 「滕県臨城附近瀨谷支隊戦闘経過要図磯情」 Ref. C11111034700. 970. 地図を参照。

<sup>22</sup> 「歩六三戦詳第一四号附表其十三」より算出。Ref. C11111253800、画像36/47 No.1105。（前掲歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報）

<sup>23</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C11111252700、画像28/55、29-30/55 No.844、855-856（前掲歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報）

第二野戦重砲聯隊の半分（4年式15糎榴弾砲12門）、独立軽装甲車第十中隊、支那駐屯軍の臨時戦車中隊なども新たに戦闘序列に加わり、併せて砲20門（歩兵部隊の聯隊砲、大隊砲を除く）軽装甲車、戦車各一中隊、人員5508人の規模に拡大した<sup>24</sup>。

中の臨時戦車中隊は新たに配属された部隊で、89式中戦車7輛と94式軽装甲車5輛、戦闘員118名と非戦闘員11名の編成で、津浦線（天津～南京）で運ばれ、3月25日1300、滕県北10キロの界河駅で降ろされ、滕県、臨城をへて支隊司令部の棗庄を目指し、百数十キロを自走してきた<sup>25</sup>。棗庄に到着したのは26日正子（2400）であったが、それより前、3月26日1755、瀬谷支隊長は次の電令を下達した。

歩兵第六十三聯隊長ハ新ニ台兒庄攻略部隊長トナリ第十一第十二中隊、野戦重砲兵第二聯隊（第二大隊、聯隊段列半部欠）及戦車隊（本夜到着ノ豫定）ヲ併セ指揮シ明二十七日朝出発シ台兒庄ニ向ヒ前進スヘシ<sup>26</sup>。

翌27日朝0800、台兒庄攻略部隊の本隊（歩兵、野戦重砲兵、独立機関銃中隊、工兵、衛生隊）が「嶧県東南方鉄道線路踏切出発」し南洛（台兒庄北西7キロ）に向かって前進を始め<sup>27</sup>、戦車中隊と軽装甲車中隊は別行動で、棗庄、嶧県から台兒庄に向かった。

攻略部隊が到着する前の朝0600から、改造38式野砲8門（口径75MM）と96式15糎（口径149.1MM）榴弾砲2門（25日到達）の支援を受け、24日先着した台兒庄派遣隊の歩兵第二大隊による第二回目の攻城作戦が行われた。朝からの突撃は多くの死傷を出しながら成功し、0750、「城内一角ヲ占領シ第五中隊之ニ続イテ城内ニ地歩ヲ確得シ午前八時城頭日章旗ヲ掲クルニ至ル」<sup>28</sup>。

この勢いで一気に城内の掃蕩を完了しようと、前進中の福栄聯隊長は1130、台兒庄北西15キロの泥溝附近で「戦車隊ハ速ニ台兒庄方向ニ突進第二大隊長ト連絡シ北門ヲ突破城内ニ侵入シ第二大隊ノ戦果拡張ニ協カスヘシ」と戦車中隊に台兒庄城内への突進を命じた。

この時、城内突入の成功に加え、午前10時頃友軍爆撃機、戦闘機6機による敵陣地の爆撃が行われ、後方から装甲部隊を始めとする新たな援軍も到着し、前線「将兵ノ士氣ヲ作興スルコト大ナルモノ」があった<sup>29</sup>。

台兒庄の城壁は北面には東北門（中正門或は大北門）、北門（小北門）という二つの門があり、

<sup>24</sup> 算出法は、3月19-4月6日第六十聯隊参加者6527人の中から、未着の第一大隊、支那駐屯軍90野砲中隊の数を差し引いた数字。3月28日時点の数字。

<sup>25</sup> 「郭里集附近戦闘詳報（第十二号）「歩兵第十聯隊」Ref. C11111170800. No. 1604.

<sup>26</sup> 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111252800 No.903.

<sup>27</sup> 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111252800 No.913.

<sup>28</sup> JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C11111253400、画像 4/32 No.934. (前掲歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報)

<sup>29</sup> 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111252800 No.915-6.



あいだの距離は700メートルであった。この日の朝、第二大隊は東北門附近より突入し、城内清真寺の一部を含む、東北角一円200メートル四方の地域を占領しているが、戦車隊に与えられた命令は、その西側の北門より侵入し、東北角の第二大隊と協力して北側から城内掃蕩を行う計画だった。台児庄の城壁は土塁約2～3メートルの上に煉瓦製城壁1.8メートルの造りで決して高くはないが、車輛の侵入を防ぐには十分の効果があった。つまり、もし戦車が入城しようとしたら、2～3メートルの水濠を亘り、北門を潜るしか方法はなかったのである。戦車隊の攻撃はうまく行ったか、歩兵第六十三聯隊の戦闘詳報を見よう。

戦車中隊は1120北洛（台児庄北西9キロ）に到着し、戦車7輛と軽装甲車5輛が進路協定を行った後、二路に分かれて前進し、戦車隊は劉家湖（台児庄北3.5キロ）東を通って台児庄北門に向う途中、まず三里庄（台児庄北西1.5キロ）附近の、友軍の砲兵を包囲する敵部隊を撃破した。城外の中国軍千名以上は、日本軍の砲兵陣地の破壊をもくろんで、鉄道西から前進して三里庄東北部にある野戦重砲兵、劉家湖附近にある第十中隊を包囲、攻撃中であり、「正午過友軍戦車隊東北方ヨリ驀進シ来リ包囲中ノ敵及劉家湖ニ進入セシ敵ノ左側背ニ迫リ之ヲ射撃セシ為」、敵は包囲を断念し、逐次鉄道線路西側に撤収した。「其間三里庄北方及西北方地区敵ノ遺棄死体累々トシ敵四～五百中退却セシモノ二百余ヲ算スルノミ」と、戦闘詳報が記録している<sup>30</sup>。



図表4 台児庄の城壁、東北城門 1938. 4. 7 ロバート・キャパ撮影

<sup>30</sup> 「歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報」 Ref. C11111253400 No.938.



一方、軽装甲車5輛は計画に沿って連絡将校の指揮で南洛を経て板橋方面（南2キロ、敵陣地集中）に前進中、突然三面より敵の射撃を受けたため後退し、鉄道西エリアでの前進を諦め、孫庄をへて劉家湖に向かった。ここで、劉家湖西西南部落より北方に前進中の敵約50名を発見し攻撃をかけたが、戦闘中、将校が負傷し、軽機関銃も故障したため一旦孫庄に集結し、故障を排除しつつ、「午後二時三十分同地ニ於テ戦車隊主力ニ合ス」<sup>31</sup>。

軽装甲車小隊は戦果を挙げないまま反転、故障を繰り返し、おまけに指揮官まで負傷して孫庄に待避した記録である。後の戦闘詳報と照合すると、1430孫庄で合流した「戦車隊主力」は、すなわち台兒庄城北外の戦場で大敗を喫し、かろうじて逃れた2輛の戦車のことである。

さて、城外の歩兵支援戦で一応の戦果を上げた本隊の戦車7輛はその後どうなったか。

劉家湖、三里庄の砲兵救援を終了した後、戦車隊は「中隊長車ヲ先頭トシ戦闘隊形ヲ以テ台兒庄西北地区ノ敵ヲ射撃シツヽ、西北門ニ向ヒ驀進」した。午後1時頃の事と推測する。ところが、

戦車隊主力ハ城門北側ニ進出セシモ 城門外水濠橋梁破壊セラレアリテ戦車ノ前進ヲ許サス 附近ニ停止シテ先ツ城門ヲ砲撃之ヲ破壊シ 中隊長ハ速ニ城内部隊ト連絡スル為自ラ徒歩城門ニ向ヒ 又小隊長ヲ城壁東北角方向ニ派遣シ同方面ヨリ城内部隊トノ連絡及進入路ノ偵察ヲナサシメ 中隊長ハ西北門附近城壁上ニ到着セシ所 敵兵群ヲナシ手榴弾ヲ投擲シツヽ攻撃シ来リ〔中隊長〕戦車位置ニ後退途中敵ノ狙撃ヲ受ケ重傷シ再ヒ起ツ能ハス<sup>32</sup>。

つまり、城内からの動静がなかったため、中隊長中島俊夫大尉は「徒歩」で城門に向かい、城壁に到着した途端、一斉攻撃を受けた。引き返す途中狙い撃ちで致命傷を受け、後死亡した。これで、本格的な戦闘が開始する前、戦車隊は最高指揮官を失うことになったが、悪夢はそれだけで済まなかった。

この時、城壁東北角に向って連絡する小隊長車1輛は、戦闘中の第二大隊と連絡がとれ、「城壁と水濠の障碍で戦車による城内進入は不可」と告げた。車列に帰還する途中、指揮官を失い、北門外に待機する戦車隊は突然、「停車場北側部落台兒庄西側部落及城壁西北部ニ現出セル敵ノ対戦車砲ノ穿貫的集中射撃ヲ受ケ」、慌てて応戦するが、「戦車ニ相踵イテ火災ヲ起シ或ハ自爆シ乗員ノ死傷」が続出した。

死亡した中島中隊長に代わって指揮をとる小隊長は、「敵火益々熾烈且地形錯雑ニシテ戦車ノ運動意ノ如クナラス」状況を鑑み、全隊の撤退を命じたが、「其小隊長車亦敵弾ヲ受ケ行動ノ自由ヲ失ヒ小隊長負傷シ戦車亦火災ヲ起スニ至ル」。その後、台兒庄東北角方面への連絡から帰還したもう1台の小隊長車も敵弾を受けて一部破壊され、小隊長は「戦車ノ損害及幹部以下死傷続出ノ状況

<sup>31</sup> 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111253400 No.941.

<sup>32</sup> 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111253400 No.942.



ヲ見独断中隊ノ集結ヲ囿リ」、部署中また敵弾を受け重傷するに至った<sup>33</sup>。

こうして突然現れた敵の対戦車砲火の集中射撃で戦車の大部分は被弾、破壊され、中隊長が死亡し、二人の小隊長も負傷した。結局、自走能力のある2輛の戦車は辛うじて孫庄（台兒庄北北西5.5キロ）に退却し、現地で待機した軽装甲車隊と合流し、車輛を修理することになった。この戦いは1300～1400の間に行われたと推定する。

こうして戦車7輛のうち、軽傷の2輛のみ戦場から脱出し、「爾余ノ戦車及乗員」は戦場に残され、抵抗を続けた。その間さらに1輛が撃破され、故障した1輛は自力で脱出し近くの三里庄（台兒庄北西1.5キロ）にたどり着き、歩兵に守られ応急修理を行った。午後3時すぎ、代わりに指揮をとった連絡将校は戦死傷者収容のため、動ける戦車2輛及び軽装甲車2輛を指揮して再び台兒庄に前進しようとしたが、三里庄東側にいたると1台は故障した。修理を得て薄暮のなか残置車輛の場所に接近しようとしたが、この時なお敵の対戦車砲の射撃は熾烈にして「少数戦車ノ前進不利ナルヲ認メ」、諦めて劉家湖に後退した。

その後、目標の大きい車輛を諦め「徒歩ノ収容班」が編成され、夜暗を利用して戦場に派遣された。しかし「敵部隊夜陰ニ乗シ我カ残置戦車附近ニ前進シ我ノ前進ヲ妨害セシ為」、負傷者のみを収容し、死体の回収は出来なかった<sup>34</sup>。

以上は、戦車部隊が大敗を喫した記録である。約1時間のうち、戦車7輛のほとんどが被弾し、その内自走できるのは2輛、大破しながら戦場から移動できたのは1輛、のこり4輛が破壊され、戦場に残された。死傷者も中隊長1、小隊長2名に、合計8名を数える。臨時戦車隊は軽装甲車1小隊と、戦車2小隊の構成と考えられ、前記軽装甲車隊の指揮者である「連絡将校」の負傷した記述を合わせると、中隊長は戦死、3個小隊の指揮将校総て負傷したことになる<sup>35</sup>。後日、残置車輛の中、もう1輛を戦場から回収し修理が出来たようだが、4月6日夜、日本軍が撤退した後、この場所に3輛の戦車の残骸が放棄されることになった。

対戦車戦を担当した中国側《第31師台兒庄戦役戦闘詳報》も、この勝利の戦闘について次のように記録した。

13時頃、敵戦車11輛が劉家湖方面より台兒庄城西北角2－300米に迫りきたる處、我が対戦車砲の砲撃を受け一瞬で6輛が破壊され、残余は一目散に北へ退却した。我が台兒庄守備軍はこれを追撃し、戦車から逃れた敵兵を射殺し車載機関銃を奪うものあり、壊れた戦車に爆弾を仕掛け、放火するものもいた。この様子を見守った園上〔村名〕の敵は救援しようにも接

<sup>33</sup> 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111253400 No.943.

<sup>34</sup> 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111253400 No.944-5.

<sup>35</sup> 支那駐屯軍臨時戦車隊の将校は6名+連絡将校1名で、後に指揮をとり負傷した連絡将校（弘瀬兵男）であったようだ（附表第十四を参照Ref. C11111253800. 1106-7.）。

近できず、30分の間、沈黙して見守るのみであった。それ以来、敵の戦車は台兒庄で活動した様子はない<sup>36</sup>。

また、対戦車砲小隊長韓正礼の回想では、所属小隊の2門は「砲弾20数発を発射し、4、5発は敵戦車に命中した。1輛は履帯が断裂して現地でぐるぐる回って進まず、1輛は燃料のガソリンが引火炎上、1輛は完全に破壊され、2輛が逃走した」と<sup>37</sup>。

#### 4. その後の戦車、装甲車の戦い

一方同じ日、独立軽装甲車第十中隊（天羽重吉大尉）は、福栄聯隊長の「速ニ孟庄ニ進出シ同方面敵ノ退路ヲ遮断シ第二大隊ノ攻撃ニ協力スヘシ」の命令を受け、三佛楼方面（砲兵陣地の劉家湖より北6キロ）に迂回し城東北部に位置する孟庄に向かった。命令は、歩兵第六十三聯隊第二大隊の城内掃蕩に協力するため、城北東側より接近して敵の退路を封じ込むという指示だが、実際の目的は、城北東部にある日本軍砲兵陣地の救援、警護と思われる。

台兒庄を攻撃する第二大隊の陣地は台兒庄の東北門周辺に集中し、協力する砲兵も城北東方向の裴庄（城北東2キロ）、孟庄（城東北1キロ）附近の部落に集中していた。この砲兵陣地の撲滅を狙った中国軍（第二十七師、黄樵松師長）の部隊が大量に北上し、東から北側に迂回し、側背後から日本軍砲兵陣地を攻撃しつづけた。この背後の敵を攻撃し、砲兵への圧力を軽減するのは、独立軽装甲車第十中隊の作戦目標であった。三佛楼をへて南下中、中隊は棗庄西（城北5.5キロ）で突然敵の射撃を受け戦闘に入り、「棗庄ヲ急襲ス逐次敵ヲ压倒中 同部落西南端ニ於テ中隊長車敵手榴弾ノ投擲ヲ受け履帯破損シ一時前進ヲ中止」した。この間敵は潘墜〔壘〕（城北4キロ、棗庄東南）方向より兵力を増加し頑強に抵抗したが、車輛の修復と共にこの敵部隊を撃退し、さらに潘墜方向に「退却中ノ敵ヲ蹂躪シ之ニ多大ノ損害」を与えた。この棗庄の戦闘における敵兵力は約400名と戦闘詳報に記録されている。棗庄での戦闘後、潘墜よりの敵迫撃砲の攻撃を受け装甲車中隊は三佛楼南の無名部落に後退した。その後、到着する福栄聯隊長の指揮下に置かれ、本隊を掩護して劉家湖（のち、聯隊司令部）に前進する命令を受けた<sup>38</sup>。軽装甲車中隊は第十二中隊の歩兵と協力して劉家湖東北部の敵（約500名）を退却させ、1720聯隊本部は劉家湖に進駐した<sup>39</sup>。この村で、台兒庄攻略部隊の指揮部が設営された。この時、裴庄にある支那駐屯軍96式15糎榴弾砲陣地を威圧する敵の大部隊はなお裴庄西北1キロもない邵庄（劉家湖東南2キロ）に集中（約700名）しており、周りを防戦車の水濠に守られ防備を固めた。この拠点の敵を駆逐しようとしても接近できない

<sup>36</sup> 前掲《台兒庄戦役史料選編》29頁。

<sup>37</sup> 韓正礼《戦防砲連台兒庄抗戦紀実》《台兒庄大戦親歴記》山東省政協文歴資料研究委員会、山東人民出版社、1970頁、73頁。

<sup>38</sup> 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111253400. No.945-6.

<sup>39</sup> 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111253400. No.951.

ため、軽装甲車中隊は裴庄北側にある敵の包囲を撃破したあと裴庄に入り、15糎榴弾砲中隊の陣地警備にあたることになった<sup>40</sup>。

劉家湖に入った福栄真平聯隊長は、日没後、台兒庄城外より敗退してきた戦車中隊隊員の一部に戦闘の経過を訊ね、また逐次孫庄に集結してくる戦車隊の惨めな姿をみて、「此日午前勇躍台兒庄二向ヒ突進シタル支那駐屯戦車隊ノ武運拙ク十分ナル活躍ヲ遂ケシテ中隊長以下多クノ将兵及戦車其他ノ兵器ヲ失ヘルヲ知り無念長歎時ヲ久ウス」<sup>41</sup>。

その後、重創を受けた戦車隊は、支那駐屯軍の重砲中隊とともに三里庄に駐留し、損害車輛の修理、整備をしながら「三里庄西側鉄道線路附近ニ在リテ右側ヲ警戒シ同方向ヨリスル敵ノ出撃」<sup>42</sup>に備える任務につき、3月29日、一部修理を得た戦車は後方援護、弾薬糧秣の輸送の補助役に回され、輸送用トラックとして使われていた<sup>43</sup>。

3月30日以降、瀬谷支隊はさらに歩兵第十聯隊も台兒庄の戦闘に投入し、これに従い戦車隊は第十聯隊に配属転換され、残る2～3輛が台兒庄周辺の戦闘に使われた。4月1日、同聯隊第二大隊による台兒庄西の彭家楼、插花廟掃蕩の戦闘に、戦車隊は速射砲、機関銃隊とともに歩兵の支援を命じられ、同日午後、台兒庄東部戦場に到着した第五師団坂本支隊を西方から策応するため、郝庄、蘭城店をへて馬庄に至り、低石橋（城東北6キロ）附近の戦闘にも参加した<sup>44</sup>。

「午後二時過砲兵ハ馬庄ニ到着シ直ニ陣地進入力強キ射撃ヲ開始シ大イニ新鋭ノ威力ヲ加フ 戦車亦既ニ其勇姿ヲ現シ敵火ヲ冒シテ驀進シ無人ノ境ヲ行クカ如ク 第一線思ハス快哉ヲ叫ブ」。こうして「戦車並適切ニ猛射スル砲兵ノ緊密ナル協カト相俟テ」、第一線の第六中隊は午後2時50分、一気に低石橋西北端に突入しこれを占領した。「本日ノ第二大隊ノ昼間攻撃ハ猛烈ニシテ恰カモ疾風枯葉ヲ捲クノ概アリ見事ナル攻撃振りトシテ推賞スルニ足ル」と第十聯隊の戦闘詳報は自慢するが<sup>45</sup>、その機動力に戦車隊（2～3輛）の存在を無視できないだろう。「我望楼ニ近接スルヤ敵ハ手榴弾ヲ投シ之カ妨害ニ勉ム其執拗ナル状敵ナカラ驚嘆ニ値ス依テ戦車ニ追隨シ望楼ニ突入セシモ敵ハ歩兵目指シテ愈々手榴弾ヲ投擲シ窮鼠反テ猫ヲ食ムノ状況ヲ呈シ我死傷続出ス」。戦車はここで、敵拠点の望楼への攻撃接近兵器として利用されたようであった<sup>46</sup>。

つづく翌日4月2日1030、周溝橋附近の攻撃にも、「戦車亦其勇姿ヲ現」し、激戦となった辺庄の攻撃にも一役を担った<sup>47</sup>。ただ、実際の戦力を検証すれば、この二日間の戦闘に参加した戦車は、

40 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111253400. No.947.

41 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111253400. No.952.

42 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111253400. No.962.

43 「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」Ref. C11111253500. No.987. 戦闘詳報には、第一線に対する補給が緊迫な様子を見て「聯隊長ハ午前八時二十五分戦車隊ヲシテ孟庄附近ノ第八中隊ニ対シ弾薬ヲ補給セシメタルカ如キ状況トナル」との記述がある。

44 「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第十三～十四号 Ref. C11111171800. No.1716. 1723.

45 「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第十三～十四号 Ref. C11111171800. No.1725-6.

46 「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第十三～十四号 Ref. C11111171800. No.1727.

47 「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第十三～十四号 Ref. C11111171800. No.1738. 1742.

せいぜい2輛（他、軽装甲車数台）ではなかろうか。

その後、戦闘詳報には第一線に出た戦車隊の記録は見当たらず、主として偵察、後方輸送の任務に就いたと思われる。

3月30日支隊本部とともに台児庄入りの第十聯隊は、主として台児庄の周辺で敵掃蕩の任務に従事し、戦場入りの後、台児庄西8キロの運河線の頓庄閘、范口二箇所を占領し、第八中隊と第二中隊の二個中隊を守備させ、運河南の中国軍と対峙したが、四方は敵軍に囲まれ孤軍奮戦の状態であった。そのため、戦車1輛は守備中隊との連絡、補充車輛として使われていた。第八中隊の守備記録に4月2日、「午前十一時三十分戦車隊来ル 小銃、機関銃弾各七千発糧秣三日分受領ス 患者七名委託後送ス」とあり、4月3日も、午後一時十五分「支隊本部ヨリ戦車ニテ連絡ニ来ル 小銃弾四八箱、機関銃弾二箱、手榴弾百二十発糧秣一日分受領ス」とあった<sup>48</sup>。この輸送用戦車は、修理できたが、戦闘力が喪失した戦車の1輛だと思われる。毎日往来しているうちに、その行動パターンは中国軍に熟知され、4月6日、聯隊全隊が泥溝撤退の直前、また砲撃をうけ、撃破された。頓庄閘の守備隊はこの光景を目撃し、赤柴聯隊長に次のように報告した。

午後二時五十分連絡ノ戦車 頓庄閘北方三百米ノ地点ニテ敵機関砲ノ為砲撃命中火炎ヲ吐キツヽ在リ 搭乗者三名ハ後方部落ニ後退ス其他「トラック」ノ姿ヲ見ス機関砲ハ東南方部落ニアリ

1630、赤柴聯隊長は頓庄閘の第八中隊に「トラック」ハ後方ニ残置シアリ続イテ搭乗者ノ行動ニ注意セヨ 弾薬糧秣ハ戦車ニ積載サレアリ敵ニ近キ為特ニ注意セヨ」と指示した。

この時（4月6日午後）、すでに瀬谷支隊長から「泥溝集結」の撤退命令（「瀬支作命第七十八号」）が出されたため、赤柴聯隊長は頓庄閘の第八中隊の戦場離脱を指示するとともに、「途中為シ得レハ戦車兵三名ト共ニ帰レ」と指示した。第八中隊はその後、指示に従い戦車の積載弾薬糧秣を「自爆焼却」させ、避難した戦車兵3名を收容して、撤退の途につく<sup>49</sup>。こうして、撤退の直前、もう1輛の戦車は破壊され、頓庄閘北300メートルの戦場に残骸を晒すことになったのである。



<sup>48</sup> 「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第十三～十四号 Ref. C11111171900. No.1759-61.

<sup>49</sup> 「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第十三～十四号 Ref. C11111171900. No.1769-1770.

## 5. 戦闘の総括

4月6日の夜、瀬谷支隊が撤退した際、戦車4輛の残骸は戦場に晒されたが、この様子は、戦地記者の報道によって国内に知らただけでなく、現地入りのオランダ人映画監督J. イベンス、戦地カメラマンR. キャパのカメラレンズを通じて世界にも広がっていった。キャパの写真に以下の2輛が写っているが、以上の記録と照合すると、場所は台児庄西北角北300メートル附近の戦場ではないか。



図表7 キャパの写真に写った2輛の残骸、1輛の車名は「はるな」と確認できる

戦地記者范長江は「慰問台児庄」の記事に対戦車戦について、こう報じた。

台児庄の戦闘の中、歩兵にとって戦車は大敵である。3月29日（正は27日）、磯谷師団は台児庄攻略失敗の恥を晴らすべく戦車11輛を動員して台児庄西北角に突撃し、後ろに小銃を構える歩兵3-400名が続いた。…この時我対戦車砲はすでにその側で待機し、敵が4-500米のところに来ると、6発を連射、その場で6輛が撃破された。残った車輛は一目散で逃げた。…その後2輛は牽引回収され、4輛は4月7日まで、台児庄城北3-400米のところを放棄された。3輛は焼かれ、1輛はエンジンの部分は無傷だった。---兵士達は戦車の上に登り自慢顔であった。…戦車残骸の側に、運転手、射撃手の死体が転がっていた<sup>50</sup>。

戦車隊はなぜ大敗したか、原因は福栄聯隊長の作戦指揮のミスと戦車隊の軽敵ではないかと考える。戦車をもって攻城するのは、そもそも無謀な戦法であり、水濠、城壁の障害などがある上、城壁から、あるいは防御陣地からの狙い撃ちの危険性は大きかった。また、たとえ無事に城門をくぐって入城したとしても、狭い路地が入り組む市街地での走行などにも難があろう。

<sup>50</sup> 范長江「慰問台児庄」、前掲《台児庄戦役史料選編》266頁。



戦車隊の壊滅に対して、軽装甲車輛の損失は相対的に少なく、この間（3月14日～4月6日）、界河、滕県、官橋、臨城、棗庄、台兒庄北側などの戦闘例をみると、装甲部隊の特長は固定地点からの攻撃ではなく、追撃、包囲、救援などの運動戦における機動性にあることが分かる。軽機関銃一丁しかないにも関わらず、大量に敵殲滅の事例が複数見られた。

では、なぜ福栄聯隊長は運動戦ではなく、戦車隊に無謀な攻城命令を出したか？

戦車隊に攻城命令を出した3月27日11時30分、福栄聯隊長一行（台兒庄攻略部隊）はまだ台兒庄に向かう途中であり、第一線の実情、地形を掴んでいない時点での命令であった。第二大隊は午前中すでに城内突入に成功し、飛行機の爆撃（午前十時）に加え、続々到着する台兒庄攻略隊（戦力は元の約三倍）の戦車隊、軽装甲車隊、増援野戦重砲兵、歩兵の一斉突撃の猛威で、一気に台兒庄を陥落できると福栄は楽観に思ったに違いない。そのため、慎重な戦闘位部署を怠ったと思われる。

また、台兒庄の前、軽装甲車部隊をもって戦力の低い四川軍を席卷した驕りと軽敵も失敗の原因であろう。四川軍と戦った時、軽装甲車は抵抗を受けたことはなく、傍若無人に戦場を駆けまわって敵の兵士を「蹂躪」して気炎を上げた。台兒庄の戦場にいきなり性能の優れるドイツ製の対戦車砲が現れたことについて、福栄聯隊長も大島中隊長も想像しなかつただろう。

この対戦車戦には、中国軍のどの部隊が担当し、どの種類の火砲が使われたか。最近の《新民晩報》の記事によると、この時、中国軍の主流の対戦車砲は「ドイツラインメタル社製PaK-35/36型37MM砲」であり、「1938年の台兒庄戦役はPaK-35/36型対戦車砲の最も活躍した場所で、中国軍はこれを以て13輛の日本軍戦車を破壊した」。同記事によると、1936年と1937年の間、中国はドイツにPaK-35/36型37MM砲数100門を発注し、1938年まで、合計砲500門、砲弾55万発を輸入した。戦場デビューしたのは、1937年8月の第二次上海事件の時であった、という<sup>51</sup>。



また、対戦車戦を演出したのは、台兒庄城内の守備を担当した第三十一師（池峰城師長）に臨時配属された対戦車砲連（中隊）の砲4門と思われる。第三十一師の戦闘詳報には「配属された第二百師<sup>52</sup>対戦車砲第五十二団（大隊）第八連（中隊）の対戦車砲4門が開封より南駅到着、一小隊を台兒庄西関王〔冠五〕副師長に指揮させ、一小隊を北駅陣地に置き、韓団長の指揮下に置く」と記している。王冠五は一八六、一八一団の一部を統率した台兒庄守備隊長の職にあり、韓世俊は一八二団

<sup>51</sup> 「37戦防砲：砸爛日軍坦克的“鉄拳”」《新民晩報》上海、2015年2月26日。

<sup>52</sup> 第二百師は蒋介石の軍事委員会が直轄する中国軍の初めての機械化師、1938年1月編成、師長は杜聿明。

の団長で北駅守備隊隊長であった<sup>53</sup>。第三十一師を取材したジャーナリスト盛成は『盛成台児庄記事』に、「廿六日、機甲部隊の対戦車砲（平射砲）は台児庄に到着、北站にて待ち伏せ」。「廿七日 此時、第三十一師は台児庄南站、北站、運河、台児庄城を守備す」と記していた<sup>54</sup>。

なお、第二十七師（黄樵松師長）の戦闘詳報には、到着した対戦車砲は第二十七師にも2門を分けられ第七十九旅の彭村（城東北三キロ、中国軍の襲撃部隊の拠点）に配備され、裴庄、邵庄、滄浪廟の敵砲兵陣地の攻撃に使われた。29日、邵庄攻撃中、「敵戦車二輛、装甲車数輛、重牽引車一輛を撃破した後、劉家湖よりの敵集中砲撃を受け、…砲手二名が犠牲、対戦車砲二門も破壊された」<sup>55</sup>、と記している。

瀬谷支隊は戦車中隊のほか、独立軽装甲車第十二中隊の車輛7が破壊され、第十中隊の車輛も被弾（装甲貫通、及び履帯折損）した記録があるが、その活動エリアは城東北部の砲兵陣地周辺であるため、第二十七師の対戦車砲によって破壊されたのであろう。

一方、戦闘詳報には記録がないが、当事者と自称した、「第3師対戦車砲連」（中隊）韓正礼小隊長の回顧もある。オーストリアBohler 47MM対戦車砲6門を装備した同中隊は「淞沪戦役」（第二次上海事件）の後、武漢に撤退し、珞珈山で訓練している間、臨時命令を受け台児庄に赴き、26日到着し、直ちに第三十一師に配属され戦闘に参加したと、戦闘経過を含め、いきいきと証言している<sup>56</sup>。

史料の性質上、前者の戦闘詳報にある6門の記録は正しいと思われるが、他にも対戦車砲部隊がこの戦闘に参加した可能性も否定出来ない。

すなわち、27日、第三十一師の複数の対戦車砲は違う方向から同時に日本軍の戦車を狙ったと考えられる。記者周鼎華は《火网上的台児庄》（《掃蕩報》1938年4月7日）の記事に、この戦闘について、「鉄鳥六機、戦車廿数台、我が陣地を猛攻、我軍廿七師黄樵松部は上村より側撃、第三十一師池峰城部は榆林、板橋より側撃、師長池は、装甲列車にて指揮を取る」と<sup>57</sup>、複数の陣地からの同時攻撃を報じている。

以上は、日本軍の戦車、装甲車部隊が台児庄で戦った記録である。参戦したのは独立軽装甲車二個中隊、支那駐屯軍臨時戦車隊一個中隊合わせて戦車7輛、軽装甲車39輛であり、そのうち戦車中隊の89式中戦車4輛、独立軽装甲車第十二中隊の94式軽装甲車7輛が撃破されたほか、同第十中隊の軽装甲車輛にも装甲貫通3 履帯折損3、前照灯破損4、誘導輪破損2の損失記録がある<sup>58</sup>。戦車の

<sup>53</sup> 「第三十一師台児庄戦役戦闘詳報」前掲《台児庄戦役史料選編》、26、27-28頁。

<sup>54</sup> 「台児庄正面殲滅戦（膠嶺血戦）」『盛成台児庄記事』北京語言大学出版社、2007年。

<sup>55</sup> 「第二十七師台児庄戦役戦闘詳報」前掲《台児庄戦役史料選編》、60、63頁。

<sup>56</sup> 前掲韓正礼《戦防砲連台児庄抗戦紀実》《台児庄大戦親歴記》70頁、72頁。ただし、「回顧談」なので、時間、場面など記憶間違いが多い。またその手柄も役職も本人ではない可能性が否定出来ない。

<sup>57</sup> 前掲「台児庄正面殲滅戦（膠嶺血戦）」『盛成台児庄記事』北京語言大学出版社、2007年。

<sup>58</sup> 「歩六三戦詳第十四号附表其第十六」、JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C11111253800、画像47/47 No. 1113 前掲歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報

弾薬消耗は、57MM戦車砲榴弾440発であった<sup>59</sup>。人員の損失の面では、臨時戦車隊117名に死傷16名（内死亡8）。独立軽装甲車第十中隊106名に9名が負傷し、第十二中隊102名の中にも9名が死傷した<sup>60</sup>。人員の死傷率は10.4%、車輛の損害率は28%であった。

図表1出典 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C01001361800 No.2072

図表2出典 青井特派員『アサヒグラフ』昭和13年10月26日号

図表3出典 陸上自衛隊土浦駐屯地武器学校展示

図表5出典 『歩兵第六十三聯隊史』、377頁

図表4, 6, 7 出典 The International Center of Photography (ICP). USA

図表8出典 百度百科「反坦克砲」

---

<sup>59</sup> 「歩六三戦詳第十四号附表其二十三」 「歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報」 Ref. C11111254400. No.1159.

<sup>60</sup> 「歩六三戦詳第十四号附表其二十一」 「歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報」 Ref. C11111254400. No.1155. 第十二中隊の記録は負傷2名であるが、3月24日から29日の間一部（車輛6、兵員20名）は第十聯隊に配属されており、その中、7名の死傷者（内死亡2）が記録されている（「戦闘詳報第十二号附表」 Ref. C11111171000. 1673.）。これを足すと第十二中隊の死傷者合計は9名（内死亡2）になるが、厳密に言えば、この7名は台児庄作戦以外郭里集附近の戦闘の死傷になる。